

適期防除と雑草対策で品質・収量を確保！

紫斑病・マメシクイガは大豆の収量・品質に影響を及ぼすため、適期に防除を行いましょう。また、刈取りに向けて除草を行い、大豆の品質向上を図りましょう。

【マメシクイガ】

防除適期 1回目：8月25日頃 2回目：9月5日頃(1回目の10日後)

- ◆ 日長に反応して成虫の発生時期が決まり、8月下旬～9月上旬に産卵盛期となる。ふ化幼虫の侵入を防ぐために暦日で2回防除が基本。
- ◆ 連作圃場や、昨年度被害の見られた圃場では被害拡大の懸念があるため、必ず適期に防除。

【紫斑病】

防除適期 開花期25日後～35日後

- ◆ 開花期から40日程度が感染時期で、気温が25℃以上・多湿条件で感染しやすい。
- ◆ マメシクイガと同時防除の場合は、マメシクイガの1回目防除の時期に合わせる。
- ◆ マメシクイガ、紫斑病の薬剤は莢まで付着するよう丁寧に散布する。



防除例

1回目防除（8月25日頃）
マメシクイガ＋紫斑病



2回目防除（9月5日頃）
マメシクイガ

★マメシクイガ、紫斑病の薬剤は莢まで付着するよう丁寧に散布する。

【雑草処理】

雑草の大型化を防ぐとともに、収穫直前に雑草の抜き取りをする手間が省けます。

- ◆ 雑草は、子実肥大の障害、汚損粒の発生に繋がる。雑草が種子を付ける前に圃場から刈出すことで、次年度に向けて圃場内の雑草の種子密度を抑えることが重要。
- ◆ 登録が「雑草茎葉散布」となっている除草剤は、大豆の茎葉にかからないように散布する。

その他の病害虫防除

【ダイズシストセンチュウ】

- ◆ 通常7月中旬以降に、大豆の生育が停止し草丈が低く、茎葉が黄変する。密度の高い圃場では根粒が激減し、収量も大きく減少する。
- ◆ 機械や長靴に卵を含んだ土壌が付着し他の圃場に伝播する。防除・刈取りなどで発生圃場に入る場合は一番最後に入り、機械や長靴は洗浄する。
- ◆ 次年度に持ち越す卵の数を減らすため、被害株が少ない場合は早めに抜き取り圃場外に搬出する。



【ハスモンヨトウ】

- ◆ 台風や低気圧の通過に伴い多数飛来することがあり、多くの作物を加害する。葉の食害が減収に繋がる。
- ◆ 幼虫は、齢期が進むほど薬剤防除の効果が劣るため、早期発見につとめ、若齢幼虫時に防除する。
- ◆ 合成ピレスロイド剤は抵抗性害虫出現防止のため、総使用回数を2回以内にする。



【ウコンノメイガ】

- ◆ 年2回発生する。葉が巻いており、開くと透明がかったアオムシが入っている。幼虫は1～数枚の葉を縦長の円筒状に巻き込み、糸で綴り合せ、中で蛹化する。
- ◆ トレボン乳剤を用いると、マメシクイガと同時に防除できる。



【マメハンミョウ】

- ◆ 成虫は、雄11～14mm、雌14～19mmの細長い甲虫。群生して大豆の葉を食害する。体液には毒があり、皮膚につくと水ぶくれができて火傷のような症状を起こすので、触らないよう注意。
- ◆ 防除する場合はマラソン粉剤3を使用する。



※農薬使用の際は、ラベルをよく確認し、適切に使用しましょう。

**熱中症を
予防しましょう！**

暑い日はこまめに
休憩・水分補給！

